

取組実績の概要（2 ページ以内）

【取組状況】

本取組では、学習成果の観点別成績評価の仕組みを中核とし、面談カウンセリング、および現場体験プログラムの実施をとおして、可視化された個々の学生の学習成果の修得状況を、「ディプロマ・サプリメント」として、年度末に発行することが可能になるなど、学習成果が可視化されるようになった。学習成果修得状況を客観的（定量的、定性的）に把握できるようになったため、本取組成果に対するアセスメントとして、学習成果の観点別成績評価（以下、観点別成績評価）、既卒者訪問プログラム、PROG等の結果分析を行い、本取組に係る学生・卒業生の資質能力向上に関する評価を行った。その結果、本取組を通じた学生の資質・能力の向上、および本学の学位プログラムの特徴、課題も明確になり、改善の方向性が客観的に示されるとともに、実際に改善に着手することができ、事業終了後の方向性も明示することができた。以下、各項について詳述する。

①e-ポートフォリオを活用した、観点別成績評価により、学習成果の修得状況を個々の学生毎に、また学位プログラム全体として、定量的かつ客観的に把握できるようになった。一方、個々の学生に対する面談カウンセリングにより、学習成果の修得状況を定性的に把握できるようになり、これらの情報について教職員間で共有することができるようになったため、学生個々の状況に応じた個別的・継続的な支援がなされるようになった。また、観点別成績評価の前提である観点別ルーブリック評価（シラバス記載）の作成については、統一尺度の必要性に鑑み、教授会での説明、告知、およびFD・SD研修会等をとおして、精度を上げる活動を行うとともに、提出されたシラバスについては学科主任による確認・承認を経て、運用されるなど、評価基準の標準化についても整備された。また、観点別成績評価で示される指標から、教員の自律的な授業改善を促進する仕組みも整った。

②現場体験プログラム（キャリアインターンシップ、学内子育て支援施設「あかちゃんひろば」への直接参加、遠隔観察、並びに専門職人材による高いレベルの事前事後指導）の能動的学習の実施により、学生は質の高い専門的実践力を身につけた。その学習成果については、e-ポートフォリオに定性的評価として継続的に蓄積され、観点別成績評価と併せて、個々の学生毎、または学位プログラム全体として、学習成果の修得状況をより精緻に把握できるようになった。

③高校生の専門職域への理解促進を図る観点から、近隣の高校と連携（包括協定）し、家庭科で実施される保育体験の事前事後指導に教員派遣で協力する保育体験プログラムを実施した。また、本学の子育て支援施設「あかちゃんひろば」への参加・観察を行い、専門職人材に対する適切な職業理解を促進することができ、アドミッション・ポリシーの観点からの高大接続が促進された。

④既卒者訪問プログラムとして、新規就職者の就職先を訪問し、学習成果に応じた資質能力形成状況についての確認（アンケート調査）とサポートを行い、質保証の仕組みを担保するとともに、その結果を本学の教育改善にフィードバックすることができた。直接訪問を断られた就職先についても、電話にてヒアリングを行った。また、在学生の資質能力の伸長を確認するためにジェネリックスキル測定（PROG）を実施し、その結果については、外部講師による解説会を踏まえた上で、大学教員との個別の面談カウンセリングの際の学習成果の目標設定に積極的に活用した。

⑤他の採択大学（特に、専門職養成の大学）との意見交換を行い、成果と課題の共有と適切な助言を得ることで、本取組成果の向上を図ることができた。また、外部からのアセスメントとして、専門職養成を主とする大学、他のAP採択大学等を訪問し、取組計画および実施状況の把握、進捗状況、成果と課題の把握をするとともに、意見交流を行った。

⑥取組進捗状況および成果へのアセスメントとして、毎年度末には、外部人材を含むAP評価委員会によるアセスメントを行い、評価・助言を得るとともに、課題を明確化した。特に、平成29年（取組2年目）に「中間評価シンポジウム」、令和元年（取組4年目）に「最終評価シンポジウム」を開催し、成果と課題を捉えるとともに、補助期間終了後の新たな展開についての構想を固めた。

⑦毎年度、以上の活動を取り纏めた「取組報告書」を作成し、成果と課題を明らかにするとともに、関係各所に送付し、本取組の普及・促進を図ることができた。

以上の取組は、学長を長とし、各学科教員、事務担当者によるAP推進委員会を中核とし、学内の各委員会と連携の上、計画・実施されたもので、学習成果を基盤とした3つのポリシーの強い連携に基づく、卒業時における質保証システムとして展開されたものと位置つけることができる。

【成果】 e-ポートフォリオを活用した、観点別成績評価システムにより、学習成果の修得状況を個々の学生毎に、また学位プログラム全体として、定量的に把握することができるようになり、また、個々の学生に対する面談カウンセリングにより、学習成果の修得状況を定性的に把握できるようになった。これらの情報を教職員間で共有することで、個別的・継続的な支援がなされるように改善が進んだ。現場体験プログラム等で得られた学習成果の向上とも相まって、学習成果全体の向上が確認された。

e-ポートフォリオに収められた個々の学生の学習成果（定量的評価、定性的評価）は、「ディプロマ・サプリメント」として発行することが可能になり、当該学生の資質能力形成の特徴（得意、不得意、バランス）を踏まえた適切な学修指導・支援、専門職への就職支援、さらには専門職採用後の育成支援のための基礎資料として、就職先での活用を推奨することが可能となり、把握された学習成果を有効に活用できるようになった。

取組最終年度には、観点別成績評価の仕組み自体に対するアセスメントを行った。在学中（平成29～30年度）の「観点別成績評価結果（GPA平均値）」と、卒業後（令和元年度）に実施した既卒者訪問プログラムで得られた「観点別就職先評価結果」とを照合した結果、各学習成果に対する評価値はほぼ同等の結果を示していることが明らかとなり、観点別成績評価方法の信頼度が確認され、本事業で進めてきた、学習成果の可視化の信頼性が担保された。この結果を踏まえ、本学の学位プログラムの特徴・課題が明らかとなった。課題として示された学習成果項目（教育保育実践力：あまり時間をかけていない上、十分に身につけられていない）については、当該科目群について、改めて授業内容の見直し、時間数の確保等の改善を進めることの必要性が明らかとなり、カリキュラム・マネジメントの観点から、改革を促進することができた。

また、専門職養成を主とする大学、他のAP採択大学への訪問、中間評価シンポジウムの実施、AP評価委員会の開催により、多くの助言を得て、取組改善および次年度の取組計画の見直しができ、本取組成果の一層の向上を図ることができた。学内外への波及効果としては、本取組の特徴（厳密な成績評価と教員の授業に対するアセスメントを組み合わせ、学習成果の向上を体系的に推し進める点）の積極的発信を行い、取組成果の共有化を進めたことが挙げられる。学内外からの参加者を得た中間評価シンポジウム、最終評価シンポジウムを実施し、本取組成果を示すと共に、それらの成果は年次報告書としてまとめ、全国の大学に告知した。

【目標の達成状況】

本取組の目標（必須指標）の達成状況については、「学生の成績評価」（令和元年度）のみが、残念ながら「未達成」となった。しかしながら、2年生は、「2.96」と目標を上回っており、令和元年時の1年生が、令和2年度においてどのような成績を修めるかが、最終的な評価になると考えられる。

[必須指標の達成度]

	平成28年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
i 学生の成績評価 [GPA 平均]	2.74	2.90	2.84
ii 学生の授業外学修時間[時間数/1週間]	12.4	16.0	21.7
iii 進路決定の割合 [%]	100	100	100
iv 事業計画に参画する教員の割合 [%]	100	100	100
v 質保証に関するFD・SDの参加率 [%]	100	100	100
vi 卒業生追跡調査の実施率 [%]	95.0	100	100

【補助期間終了後の展開】

補助期間終了後の継続発展に向けた取組は次の通り。本取組は、年次毎に発行された「取組報告書」に示す「成果と課題」に従い、取組自体を発展させているが、補助事業終了後においても、同様に取組を展開する。また、本学の改組転換（平成31（2019）年度入学生を以て募集停止、2022年度の4年制学部開設に向けて、2021年度に設置申請予定）における継承教育機関「東海大学児童教育学部」（仮称）において、本取組内容を継承・発展させた教育プログラムとして展開する予定である。